プロ野球選手・OBのためのキャリアサポートマガジン“ニューボール” 2012

NEW BALL

New Ballインタビュー

引退後、新しい人生を切り拓いた4人の元選手たち

現役プロ野球選手、“セカンドキャリア”へのリアルな意識

03 病院のベッドの上、妻がもってきてくれた求人広告からすべてが始まった。野球塾は元プロ野球選手6名が所属する規模に急成長。

高見澤 考史（たかみざわ こうじ）氏
元 オリックス・ブルーウェーブ
有限会社アーデルバッティングドーム
［代表取締役社長／野球塾経営］

一時はクリーンナップに駆け上がった

たび重なる右ヒジのケガに加えて、ついに腰にもきた。ボルトを入れなければならないほどの手術。2004年9月、高見澤は病院のベッドに伏していた。すでに前年のオフに自由契約の身になっていた。彼のプロ野球生活は実質3年間。仰木監督率いるオリックスで入団初年度の2001年のシーズンから一軍出場を果たし、2年目は石毛監督のもと、一時3番を打つほどの活躍を挙げ、将来に期待がかかった。しかし、3年目からはケガに泣かされ、オフの合同トライアウトにも出場できず、04年は2年越しの起死回生を誓って古巣の東京ガスのチームに参加してリハビリ&トレーニングをつんでいたところだった…。だが、この腰痛の手術でプロ復活への道は断たれた。

「病室の天井を見つめながらたたばく然と。…ああ、これで終わった。故郷の群馬に帰って、整備工場なんかで働きながら、野球で何かできたらいいなぁ…くらいしか思い浮かびませんでしたね。そんな折、うちの奥さんが、ここ『アーデルバッティングドーム』の社員募集の求人チラシを持ってきてくれたんです。妻は実家が埼玉なので。とりあえずは野球関係の仕事でもあるし、会社概要にざっと目を通して、すぐ応募しました。お金も使うだけ使っちゃって、貯えもありませんでしたし」

ちなみに高見澤は、2000年に東京ガスからドラフト6位でオリックス・ブルーウェーブに"契約金ゼロ、出来高制"枠で入団した初の選手。"金より夢を選んだ男"なのだ。

偶然か必然か…できすぎた!?出会い

「"えっ、君、プロでやってたのか！すぐにでも来てくれよ！"面接してくれたのは社長で、翌日すぐに採用の知らせがありました。面接の場で告げられたんですが、社員募集をした事情は、実は当時の店長さんが10月にバッティンングドームを辞めるということで、その後釜探しだったのです」

高見澤は労せずして再就職先を見つけることができた。

『アーデルバッティングドーム』は1997年に埼玉・岩槻の国道16号沿いにできた、ロードサイド型店舗のバッティングセンター。ドーム球場を模した、さながら屋内練習場といえる設備で駐車場完備。当時は斬新なバーチャル映像投球マシンが評判となり、近隣の人気スポットとなった。オーナーは他にもスポーツ系の施設、スーパー銭湯などをいくつか展開している。高見澤の所属は『有限会社アーデルバッティングドーム』の社員となったかたちだ。

「社長から話があったんです。バッティングセンターだけでは集客がそろそろ落ちてきているから、会社として何か新しい事業を企画する必要があると。僕が独自にできること・やりたいことと言えば、やっぱり野球を教えることです。お互いの希望とタイミングがぴったり合い、"野球塾"なるものを新たに立ち上げる流れになったのです。いや、"野球塾をやらさせていただく"機会をいただわけですね」

プロ野球選手として過ごした身分の尊さをあらためて実感

急展開だった。退院してすぐの10月には入社、翌11月には"元オリックス選手・高見澤考史の野球塾"がさっそくスタートした。いつかはやりたいと思っていた指導者の立場。それが瞬く間にころがりこんできたわけだが、店長として考えなければならない課題は山積みだった。…どうやって生徒を募るのか、経費をどう捻出するのか、レッスンメニューをどう組み立てるのか、料金体系はどうするのか…などなど。

「"野球塾はじめます！"という手作りのチラシ配りからはじめましたよ。集まった最初の塾生は8人。でもそれが半年後に80名に増えたんです。これは事業としてイケるかも、という手応えを感じましたね。最初の2年間は一人でがむしゃらに走りっぱなしという感じでしたが、増え続ける入塾申し込みを前に、いよいよ一人では手が回らなくなって。そこでオリックス時代の同僚で同い年の、福留 宏紀（1997年入団〜2005年末戦力外）に声をかけたんです。彼は二つ返事で、引退後すぐの2006年の年明けから来てくれることになりました。二人体制になってやれることがぐっと広がって、クラスも増やして、僕らの給料も考えて月謝もきちんとした額に設定し直して。僕はどちらかというと、昭和的な根性肌なんですけど、福留はレッスンを楽しく盛り上げる仕掛けをいろいろ考えるセンスがスマートなんですよ。福留のおかげでアピール度もすごく上がって、規模拡大を計画立てて考えられるようになったんです」

高見澤・福留の元オリックス・コンビのもとに、野球少年・少女たちがぞくぞくと集まってくる。もちろんその背景には、野球ファンである保護者の興味、賛同、口コミがあったことは言うまでもない。

2年後の2008年、高見澤はオーナーから経営権を買い取り、あらためて独立した『有限会社 アーデルバッティングドーム』の代表取締役社長の座に就いた。

元プロ野球選手みんなで運営する理想的な会社に

埼玉初の硬式マシン導入、屋根付き練習場の拡充など、高見澤と福留は元プロ選手の経験を活かし積極的な設備投資を行っていった。塾生同士で複数のチームを組み、グラウンドを借りてリーグ戦さながらの試合を行えるようにもなった。何しろ塾生の数は250名を越えようとしていたのだ。高見澤は将来を見据え、増員するスタッフ（社員でありコーチ）を元プロ野球選手で固めようと構想をもちはじめていた。

2009年には新たに●河野友軌氏（元横浜ベイスターズ2003〜2008）を採用。続いて2010年に、●徳元 敏氏（元オリックス・ブルーウェーブ、元楽天ゴールデン・イーグルス1998〜2007）、●相川良太氏（元オリックス・ブルーウェーブ、元オリックス・バファローズ1999〜2010）、●川崎泰央氏（元オリックス・ブルーウェーブ1996〜2000）の3名が就任した。

アーデル野球塾は一気に元プロ野球選手豪華6名体制となったのだった。コーチを派遣してほしいと提携関係を結ぶ他地域のスポーツ施設も増え、塾生の数は現在のべ400名を突破した。レッスンは早朝から夜までおよぶ。6人でフル稼働の毎日だ。

"金より夢を選んだ男"の"夢"は、現役を退いてからさらに大きく花開くことになった。

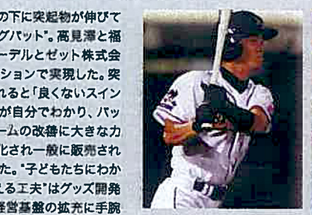
「自分は思い立ったら突っ走ってすぐ実行してしまう性格。そこをスタッフたちが、5人5様の個性で絶妙にフォローしてくれる。野球のチームといっしょで、全員でやってる会社です。ほんと、僕一人じゃとてもここまでこれなかった。今、アホが付くくらい楽しい毎日です！」

運営には保護者たちも積極的に協力してくれている。「ここをもっとこうしたら良くなる」という貴重なアドバイス、提案も受け入れつつ、ここまで野球を愛する者みんなで創り上げてきた。夏休みの合宿や各種イベント開催など、さまざまな企画を実施できるようになった。

現役時代「ああしておけばよかった…」「ああしておいてよかった！」

突然のケガに泣かされた。直接ぶつけたりひねったりしたわけではないのに、無理をして肘と腰に負担をかけていた。これは後悔しても仕方ないことですが……。
反面、足をフルに使い"人と違うプレー"を精一杯アピールした結果、初年度から一軍で使ってもらうことができました。もてる力を出し切った選手生活でした。引退は早かったけど、生涯の財産になる素晴らしい出会いに恵まれ、本当に野球やってて良かった！

←グリップエンドの下に突起物が伸びている"トレーニングバット"。高見澤と福留が考案し、アーデルとゼット株式会社のコラボレーションで実現した。突起物が体に触れると「良くないスイング」だったことが自分でわかり、バッティングフォームの改善に大きな力となる。商品化され一般に販売されるようになった。"子どもたちにわかりやすく教える工夫"はグッズ開発にも波及。経営基盤の拡充に手腕は高まる。



アーデルバッティングドーム
ADEC Batting Dome
with ADEC Baseball School
http://play-ball.jp/
■岩槻本校　■田無校
□神宮校（明治神宮外苑バッティングドームに開校を検討中）

［Profile］高見澤考史（たかみざわ・こうじ）1975年群馬県出身。2000年、ドラフト6位、当時実験的に行われていた"契約金なしの出来高制"という条件でオリックス・ブルーウェーブに入団。50m6秒1の俊足、理想的と評されるフォームからのバッティングで02年には62試合に出場。しかし翌03年は手術を要するケガにたたられ一軍出場できず、そのまま自由契約となった。